第23号（2021年秋号）
発行日　2021年11月26日

信州大学教職支援センター
Shinshu University
Center for the Teaching Profession

教職支援センター　ニューズレター

巻頭言

【教 科 書 雑 感】

コロナ禍により小中学校ではGIGAスクール構想による「1人1台」の情報端末を使った学習が進んだこと、2024年度から紙の教科書の内容をデジタル化した「学習者用デジタル教科書」の導入が計画されていることから、文部科学省は来年度予算の概算要求に、国公私立の全ての小5～中3に1教科分のデジタル教科書提供をめざし約51億円を盛り込んだ。私たちは、これからどのように教科書と付き合っていけばよいのだろうか。

教科書は1969年度以降小・中学校の全学年に無償給与(義務教育諸学校の教科用図書の無償に関する法律・義務教育諸学校の教科用図書の無償措置に関する法律)され、「小学校、中学校、義務教育学校、高等学校、中等教育学校及びこれらに準ずる学校において、教育課程の構成に応じて組織排列された教科の主たる教材として、教授の用に供せられる児童又は生徒用図書であり、文部科学大臣の検定を経たもの又は文部科学省が著作の名義を有するもの」(教科書の発行に関する臨時措置法第2条)、「小学校においては、これらの教科書を使用しなければならない」(学校教育法第34条)とされていることから、私たちは学校で教科書は配布され、教科書の内容はみんな同じで、その内容を理解したかが試験などで問われると経験知で思い込んでいるのではないだろうか。

本年度、(公財)教科書研究センターの研究で、現職の社会を苦手と感じている小学校の先生方に教科書の使い方についてインタビュー調査をしているが、社会という教科特性もあるが、「教科書の効果的な使い方がわからず困っている」「教科書はテスト対策として使うことが多い」という状況がみえてきた。また、公開されている教科書検定に当たって教科書会社が作成した教科書の編修上特に意を用いた点や特色等を学習指導要領等に照らして説明した「教科書編修趣意書」の存在を知らない、教材研究等で現在使用している教科書と他社の教科書とを見比べたことがほとんどないという状況もみえてきた。

教科書がデジタルでも紙でも、教師に求められる専門性は、新学習指導要領が求めているカリキュラム・マネジメントに関わる資質・能力であろう。それは、「教科書を」教えるのではなく、学習の基盤となる資質・能力(言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力)を培う教育課程を、教師は専門職として編成し、子供たちが主体的な学びを展開するように「教科書を活用して」実践する能力のこととともいえる。つまり、問われる専門性は、紙面が限られている教科書の行間をどこまで読み込み、児童生徒が教科書を活用して主体的な学びを展開できるように授業を設計し、実践につなげられるかである。また、デジタル教科書の派生であるデジタル教材は、紙の教科書の行間をICTを活用して具現化しているともいえる。教職課程では実践的な指導を求められているが、行間を読める資質・能力を育てる学びを展開していきたいものである。

小山茂喜（教職支援センター　教授）

教職支援センター

シリーズ　活躍する卒業生

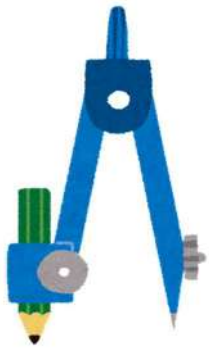
教職支援センターの前身の教職教育部が発足して１０年以上経ち、多くの卒業生が教育現場で活躍しています。毎回テーマを決めて、卒業生の活躍を紹介します。

～ vol.16　数学科教員編 ～

長野県上田高等学校　数学科　教諭

理学部　数理・自然情報科学科　平成２８年度卒業

佐藤　稜花　先生



教員として働きはじめ、４年半が経ちました。２年目から担任をもち、この春無事にクラスの生徒たちを卒業させたところです。高校時代に数学の楽しさを知り、数学科に行けばもっと数学が学べると思い数学科へ進学し、数学の教員になればずっと数学に触れていられると思い数学の教員になりました。

同僚の先生方と数学について話をする中で、数学についての知識も授業展開の工夫も学ぶことが多くあり、改めて数学の楽しさと奥深さを感じています。また、生徒と話をする中で別解やうまい説明を発見することもあり、生徒から学ぶことも多いです。

１年目のことですが、授業を担当しているクラスの担任の先生から、クラスでアンケートをとったら、「好き・得意な教科」で数学が１位だったと教えてもらいました。入学当初にとったアンケートでは、数学が１位ではなかったとのことで、授業を通して、数学を得意・好きと思ってもらえる手伝いができたかなと感じられました。教員の仕事は成果が目に見えないことが多いですが、時々こういった嬉しいことがあるので、へこたれずに頑張れています。

数学だけをやっている訳にはいかないのが教員の大変なところで、部活動の顧問やクラス担任や分掌業務など仕事は沢山あります。私は今年度の分掌業務として、生徒会の係で文化祭の担当をし、文化祭実行委員の生徒とともに文化祭の企画・運営を行いました。コロナ禍での文化祭の開催は懸念事項ばかりで、文化祭までの数か月は残業も多く、本当に忙しかったです。幸いなことに文化祭の時期には感染状況は落ち着いており、無事に文化祭は開催することができ、生徒の楽しむ様子も見ることができました。

教員の仕事は楽しいことや嬉しいことも多くありますが、苦しいこともあるので、適度に休みつつ、手を抜けるところは抜きつつ、心も体も健康でいることが、生徒の為にも自分の為にもなると思います。これからも数学を楽しみ、少しでも楽しさを伝えられるように精進していきたいと思います。

学校法人外語学園　松本第一高等学校　数学科　教諭

大学院総合理工学研究科　令和２年度修了

重森　壮太　先生

2019年より松本第一高校で非常勤講師として勤務し，大学院に通いながら教育現場での経験を積みました。今年3月に大学院を修了し，4月より常勤の教員として勤務しています。 常勤になってからの約半年は分からないことだらけで慌ただしく過ぎ去りました。周りの先生方や生徒達に助けられながら乗り切ってきました。

私は，数学が得意である生徒だけでなく苦手に感じる生徒にも，数学の面白さや有用性を実感させたいという思いから教員を目指しました。しかし，ただ普通に授業を行うだけではそれを達成することは難しいと感じています。生徒を授業に惹き込むために，抽象的な数学の問題を実際に考えやすい具体的な問題に例えたり，生徒が興味を持ってくれそうな話題を探したりして，生徒が数学を身近に感じられるように試行錯誤する日々です。また，生徒が授業内容を理解できたときには褒め，生徒のやる気を引き上げることを試みています。授業はうまくいかないことばかりですが，生徒達が相談し教え合ったり，問題を積極的に考えてくれたりする姿が見られたときはとても嬉しく思います。

部活動ではバドミントン部の顧問をしています。私にはバドミントンの経験が無く技術的な指導もできないため，顧問として何ができるかわからず不安に思うことも多くありました。しかし，日々頑張る選手たちを見て，練習に一緒に参加しているとそんな不安も吹き飛びました。楽しんで，そして目標に向かって主体的に競技に打ち込んでいる選手たちの姿を見ているとき，顧問になって良かったと思います。選手達が部活動に打ち込めるのは2年程度と短い期間ですが，その2年間を濃密な時間にできるように，顧問として最大限のサポートをしていきたいです。

既に教育実習を経験した方や，学校での様々なボランティアに携わっている方なら想像がつくかもしれませんが，子ども達は若い教員に対して親しみを持って接してきてくれます。私は，生徒との年齢差が大きくない今だからこそ，生徒に身近に感じてもらえる教員でありたいと思っています。日々成長する生徒達に負けないように，私自身も成長し続けていきたいと思います。

教職支援センター９～１１月の動き

〇長野県総合教育センター連携講座：「進路指導・キャリア教育の理論と実践」(8 /25～9/5)、「教職論」(9/1～2) 、「学校教育と情報」(9/6～7) 、「教育の思想と歴史」(9/13～14) 、「教育課程の編制法」(9/14～30) ＜すべてオンラインまたはオンデマンドでの開講＞、〇教職実践演習地域公開研究授業参観(人文学部・理学部9/10・30、工学部10/22・25、農学部10/13、繊維学部9/8)、〇教職支援センター拡大打合せ会議(9/10)、〇教職教育委員会(9/14)、〇長野県総合教育センターと教職実践演習との協働でカリキュラム研修講座(10/7（上田キャンパス） 、8（松本キャンパス）)、〇教職教育委員会学芸員養成課程実施部会（10/13） 、〇教員免許状更新講習に関する長野県教育委員会と県内関係者打ち合わせ会（10/29） 、〇教職支援センター運営委員会（11/9） 、〇教員免許更新支援センター会議(11/10)、〇教員免許更新支援センター運営会議(11/16)、〇農学部教育実習等に関する懇談会(11/30)

地域連携プロジェクト
連携パートナーからのメッセージ

今年も多くの学生さんに来ていただいて、とてもありがたく思っています。

年齢も近く、すぐに子どもたちにとけ込んでくれる学生さんたちに来ていただけることは、圧倒的に高齢スタッフが多い「はぐルッポ」にとってもありがたいことです。

「はぐルッポ」は不登校や不登校傾向の子どもが、自分たちのやりたいことを自分たちで決めて遊んだりして過ごしている「子どもの居場所」です。子どもが自分でエネルギーをためて動き出すのを待っている場所です。

来てくれる学生さんたちは、子どもたちと、とてもいい関わりをしてくれています。

ある学生さんは、魚取りをしたいと子どもから聞くと、壊れていた網を直して一緒に川に入ってくれました。いっぱい魚を取って子どもは得意顔で帰ってきました。ある学生さんは、得意なゲームでガチで対戦して、また一緒にやろうと子どもたちに誘われていました。折り紙の得意な子どもから一生懸命習っている学生さんもいました。そんな時の子どもはとてもうれしそうです。また、ある学生さんは、子どもたちが作った「はぐルッポの歌」に伴奏を付けてくれました。

このように学生さんたちは、子どもたちの思いに答えて楽しい時間にしてくれています。学生さんたちに帰るときに「どうだった？」と聞くと、明るい顔で「楽しかったです」と言ってくれて私たちもうれしくなります。ある学生さんは「不登校の子どもたちがいるからと思ってきたが、どの子も不登校とは思えない」と言っていました。不登校の子どもという目で見るのでなく、学生さん自身が一緒に楽しんで接してくれていることが、子どもたちにとってもうれしいのだと思います。

ただ、大勢の学生さんたちにエントリーしていただきながら、実際に来てくれている学生さんが少ないのは、授業やバイトの関係もあるでしょうが、こちらでも学生さんたちに達成感を持っていただけるような環境を整えなければいけないと申し訳なく思っています。毎回のように来てくれる学生さんもいてくれますので、単位になるといいなぁと思ったりもしています。

（子どもの支援・相談スペース「はぐルッポ」西森尚己）

「はぐルッポ」は、不登校や不登校傾向の子どもさん達を支援する場です。教職課程の信大生達が、こちらでもお世話になっています。

編集後記

今号も、教科書との向き合い方についての巻頭言、数学科の教員として活躍する卒業生からの報告、地域連携パートナーからのあたたかいメッセージやご提案…と充実した内容を掲載することができました。気づけば2021年もあと約1ヶ月、教職支援センターでも来年度に向け動き始めています。コロナを前提にどのように充実した授業や活動を提供できるのか、センター教員一同で工夫を重ねていきたいと思います。(広報担当　河野桃子)

信州大学 SHINSHU UNIVERSITY | 教職支援センター

■〒390-8621　長野県松本市旭3-1-1　■TEL：0263-37-3367　■MAIL：kyousho@shinshu-u.ac.jp
■URL：http://kyoushoku.shinshu-u.ac.jp/kyoushoku/kyoushokutop.html